

成人看護学における OSCE (Objective Structured Clinical Examination) を活用した看護技術の主体的習得に関する学び

庄村雅子^{*1}・佐藤幹代^{*1}・高橋奈津子^{*1}・佐藤正美^{*1}・小島善和^{*1}

Learning Experience for OSCE Enhanced Self-Motivated Adult Nursing Practice Acquisition

Masako SHOMURA^{*1}, Mikiyo SATO^{*1}, Natsuko TAKAHASHI^{*1},
Masami SATO^{*1} and Yoshikazu KOJIMA^{*1}

〈抄録〉

目的：成人看護学の慢性期看護学の OSCE (Objective Structured Clinical Examination) の学習過程で、看護実践能力および実践能力の主体的習得について学生が認識した目標達成や課題を含む包括的な学びを明らかにすること。方法：所属学部倫理審査の承認後、2007年度看護大学3年生74名の OSCE に関する経験の自由記載レポートを対象とし質的帰納的に分析した。結果：OSCE を活用した看護技術の主体的獲得に関する学びは10カテゴリ、【OSCE に向けた学習努力への充足と成果の実感】等5つに分類された。考察：OSCE は、試験を課されることで自然と解決策を模索でき、ピア評価と自己評価および試験後のフィードバックは学びの意味づけや課題と取り組み意欲を得る貴重な機会となり、看護を志向する態度も培っていた。OSCE の自己学習環境と資源の整備が、より効果的に主体的学びを促すと考える。

Key words：成人看護学、OSCE、看護実践能力、主体的習得

I. はじめに

近年のめざましい医療の高度化・複雑化に伴い、より高い看護実践能力が社会的に要請されている。看護基礎教育における実用的な看護実践能力（アセスメント、計画、ケア、評価を含む）の形成は、重要課題として多くの討議や報告がなされている¹⁾。

成人看護学領域は、看護実践の応用力を身に付ける上でカリキュラムの中で重要な役割を担う一つの領域といえる。研究者らは、成人看護学において学生が、講義と演習および実習へと連続して看護過程を展開できる看護実践能力を主体的に着実に習得できるよう教育介入に工夫を重ねている²⁾。

私達は、4年生大学3年次前期の慢性期看護論において、看護実践能力の主体的習得を目指し、独自に OSCE 教材を作成し、臨床実践に密着した状況設定下での系統的な技術試験を実施し8年目を迎える。しかし、OSCE から臨地実習へと連続して、学生の看護実践能力の主体的獲得を促すには、学生自身の自己の達成度と課題の自覚が不十分であり、取り組み姿勢が不足していることもまた課題であった²⁾。

そこで今回は、実施と改善を重ねてきた OSCE をより実践的な状況設定となるよう再編成した。また、従来の学生と教員間の相互評価に加え、学生が主体的に学びを記述することで成長を促すのに効果的なポートフォリオ、および学生間のピア評価を導入するよう改善した。

OSCE での学生の学びに基づき、成人看護学領域にお

^{*1} 東海大学健康科学部看護学科

ける看護技術の主体的習得能力育成へ効果的な教育プログラムを開発する取り組みは看護教育における新たな取り組みといえる。看護実践能力向上へつながる教育プログラムを構築する試みは、社会のニーズに応える非常に貢献度の高い研究課題といえる。

なお、本研究では主体的習得を学生が自発的に努力し看護実践技術を身につけること、と定義する。

II. 研究目的

成人看護学領域の慢性期看護論で実施している OSCE の学習課程における、看護実践能力および実践能力の主体的習得状況などに関する学生が認識した目標達成や課題を含む包括的な学びについて明らかにすること。

III. OSCE の実際

1. OSCE を実施する 4 つの技術項目

- ・点滴静脈内注射を受ける患者の輸液管理法
- ・血糖の不安定な状態にある患者の簡易血糖測定法
- ・高血糖状態にある患者のインスリン注射法
- ・錠剤と散剤の経口与薬法

2. OSCE までのプロセス

- 1) コースオリエンテーション：意義・目的・評価・方法の説明
- 2) 技術演習：約 3 時間で 4 技術を独自に作成した資料と評価表（①感染の防止、②指示確認、③患者への説明と本人確認、④技術の確実な実施、⑤実施後の確認と後片付け、⑥安全・安楽の確認と保証、の 6 つの共通した流れで作成した）と視聴覚教材（学生が繰り返し技術が確認できるよう教員によるデモンストレーションを録画したもの）を用い練習し、主体的習得のための準備を促す。

3) 自己練習：約 1 ヶ月間学生は 14 時間の教員のオフィスアワー及び自己評価とピア評価を繰り返し、練習する。

4) OSCE：当日シナリオをくじ引きし、4 技術のうち実施する 1 技術と状況設定の情報が与えられる。制限時間 10 分。患者役は 4 年次学生が担当。試験後、患者役の先輩と教員とからフィードバックを与えられる。

3. OSCE で用いるシナリオの例

学生は以下のシナリオを試験当日直前に読み、状況に配慮しながら指定の 1 技術を 10 分以内に実施する。OSCE は、状況設定のシナリオを学生がよく理解して、患者の状態に配慮しながら技術を実践できるかを試験することを特徴の一つとする。本研究における OSCE をどのような方法で行っているのかを具体的に提示し、取り組む際の参考として、シナリオを例示した（図 1）。

4. OSCE の実際の様子

写真 1 に OSCE の実際の様子を示した。試験中はカーテンで個室に仕切り、1 学生に採点教員 1 名、患者役 4 年生 1 名がつく。試験では原則的に行為を声に出すよう指示されているが、忘れていた場合は 1 度だけ注意する。

IV. 方 法

1. 対 象

総合大学看護学科 3 年生 78 名

2. 調査期間

2007 年 6 月～7 月

3. 調査方法

- 1) 調査内容：① OSCE を通して学生が経験したこと

◆ 高血糖状態にある患者のインスリン注射法
場面設定
山田花子、40 歳、女性。高血糖のため昨日入院し、食前血糖値に応じた指示インスリン量をその都度、指示箋で確認して血糖値をコントロールしています。昼食前の血糖値は 360 mg/dl で、インスリン注射を行うことになりました。

図 1 シナリオの一例



写真 1 OSCE の様子
(実際はカーテンを閉めて行っている)

の学生自身の意味づけ、②学びや課題・反省等の自分自身の思いや受け止め、③周囲の学生や教員とのやり取りに関する思いや受け止め。

- 2) 調査方法：上記内容を、ポートフォリオと呼び、A4版用紙約1枚、字数制限なしで自由に記述してもらい、回収されたすべての記録を、分析の記述データとした。

2. 分析方法

Berelson.B の内容分析³⁾を参考に質的分析を行った。

- 1) 学生の記述報告を全て逐語記録としてデータ化する。
- 2) 学生個別に逐語記録を精読し、意味の理解できる長さに区切り、分節化した単位を抽象化していき、個別分析のコードを導く。
- 3) 全員の個別分析のコードを、抽象化していき、サブカテゴリ、カテゴリ、分類を導く。
- 4) 分類間の関係性を図式化する。

分析結果の信頼性・妥当性の確保のため、同一データを3名の研究者により分析後、分析に加わっていない2名の研究者が分析過程および分類名の適切性を確認した。

4. 倫理的配慮

研究者らの所属機関の倫理審査委員会における承認を受け、該当科目の成績公表後調査を開始した。学生へは口頭でプライバシー厳守等の説明後、掲示により承諾を得た。

V. 結 果

1. OSCE を活用した看護技術の主体的獲得に関する学び

レポートは学生78名中74名が提出し、回収率は94.9%だった。分析の記述データは、総計116,042文字だ

った。

手順に従い分析した結果、508個別分析コード、37サブカテゴリ、10カテゴリ、5分類へと統合された(表1)。

以下、【 】を分類、〈 〉をカテゴリ、下線をサブカテゴリとして分析結果を、5つの分類ごとに説明する。

1) 【OSCE に向けた学習努力への充足と成果の実感】

OSCE のプロセス全般に関して、他の技術試験と比べて学ぶことが多く今までにない有効な学習体験などと認識されていた。これは、〈OSCE に向けた技術習得過程を通して学習成果への充足感〉と表された。

OSCE では単に手技だけでなく感染防止、指示確認と準備、本人確認と説明、確実な実施、後片付けと記録、安全と安楽の保障と一連の流れに沿い実施するため、技術演習を通した確認と危険防止・命を預かる責任の重さの強い認識などが表われ、これらから〈リアルな状況と緊張感の中で実践力が培われる実感〉が導かれた。約1カ月にわたり OSCE へ向けた懸命な自己練習に伴う試験を課され何度も練習するためにより着実に技術が身につく実感などからは、〈試験に向けた反復練習による実践に即した技術の確実な習得〉が現された。

2) 【自己の学びを振り返り自ら解決の糸口を見出す】

練習初期は思うように上手くいかず、失敗体験の反省からの自己の技術の未熟さと正確な技術習得の手がかりへの気づきが学生の認識として多く表され、〈自己の学びを振り返ることで技術改善の糸口を見出す〉にまとめられた。前年度より導入したピア評価に関する自己の患者役経験を通した患者の痛みや気持ちを知る手がかりの獲得と患者の視点からの自己の課題の明確化からは、〈ピア評価を通じた学生相互の成長と自己の課題の明確化〉が特徴的に導き出された。OSCE では緊張が避けられず、反復練習で得られた成果を試験でうまく発揮できない歯がゆさとして表現され、〈練習や試験での反省・悔しさからの技術や態度をよくする動機づけの獲得〉へと統合された。

表1 OSCE を活用した看護技術の主体的習得に関する学び

サブカテゴリ (37)	カテゴリ (10)	分類 (5)
- OSCE への準備過程から試験を通じ技術習得の効果を実感し達成感を得る - OSCE は他の技術テストに比べプロセスを通して学ぶことが多く今までにない有効な学習体験 他1つ	1. OSCE に向けた技術習得過程を通じた学習成果への充足感	
- OSCE での実践に近いリアルな緊張感を通じた学習効果と今後の実習や実践への有用さの実感 - 技術の練習を通して確認と危険防止の意味と命を預かる責任の重さの強い認識 他1つ	2. リアルな状況と緊張感のなかで実践力が培われる実感	1. OSCE に向けた学習努力への充足と成果の実感
- 試験を課され何度も練習するために、より着実に技術が身につく実感 - OSCE までの反復練習過程を通じた各手順の意義や適切な手技および看護師の態度の体得 - 提供する看護技術の根拠の理解の重要性の再認識 他3つ	3. 試験に向けた反復練習による実践に即した技術の着実な習得	
- 自己評価による自分自身の行為の確認の有効さの実感 - 失敗体験の反省からの自己の技術の未熟さと正確な技術習得の手がかりへの気づき 他3つ	4. 自己の学びを振り返ることで技術改善の糸口を見出す	
- ピア評価によるプレテストのような緊張感ある客観的な自分の手技の査定と、自分の弱点の発見と課題の明確化への有用性の実感 - 自己の患者役経験を通じた患者の痛みや気持ちを知る手がかりの習得と患者の視点からの自己の課題の明確化 他3つ	5. ピア評価を通じた学生間相互の成長と自己の課題の明確化	2. 自己の学びを振り返り自ら解決の糸口を見出す
- 反復練習で得られた成果を試験でうまく発揮できない歯がゆさ - OSCE を通し練習では出来ても、慣れない状況や人の前では、緊張して忘れることや上手くいかないことがあること、試験で忘れた内容と悔しさを経験したことは今後も記憶に鮮明に残る貴重なよい機会 他2つ	6. 練習や試験での反省や悔しさからの技術や態度を高める動機づけの獲得	
- 教員や患者役から肯定的なフィードバックにより自己効力感が高まり学習への動機付けとなる - 試験の評価における教員と患者役の先輩学生からの技術や態度への肯定的コメントから得られる喜びと自信	7. 教員や患者役上級生からの肯定的なフィードバックによる自信や自己効力感の高まり	3. 学んだことを自分のものにする
- OSCE を通して自分に適した技術学習の方法をつかめた実感 - 評価表を活用した練習による正確な手順での看護技術の獲得 - 資源を活用し効果的に自己学習ができた実感 他2つ	8. 自分に適した自己学習のこつをつかむ	
- 看護師としてあるべき姿勢や態度に気づく - 看護について深く考えることでの看護に対する思い入れの深まり	9. 看護を深く志向する態度が身につく	4. 看護を志向する態度の向上
- OSCE 技術試験の項目や対象の変更に関する望み - OSCE 評価内容や手順に関する疑問や修正の要望	10. OSCE をよりよい体制で受けることへの要望	5. OSCE の改善への要望

3) 【学んだことを自分のものにする】

OSCE 終了後に常に行ってきた教員と患者役からのフィードバックに関して、試験後の評価における教員と患者役4年生からの技術や態度への肯定的なコメントから得られる喜びと自信などが引き出された。これらは、＜教員や患者役上級生からの肯定的なフィードバックによる自信や自己効力感の高まり＞に総合された。試験を課され繰り返し自己練習することから、技術の自己学習を通じた自分に合う技術の自己学習の有効性と必要性の認識などが示され、＜自分に適した自己学習のこつをつかむ＞にまとめられた。

4) 【看護を志向する態度の向上】

シナリオによる状況設定が加わることから、患者への気遣いを強く意識する学生が多く、看護師としてあるべき姿勢や態度が身につくや看護について深くかんがえることでの看護に対する思い入れの深まりなどが表された。これは単なる技術教育を超えて看護観が育まれる、＜看護を深く志向する態度が身につく＞と示された。

5) 【OSCE の改善への要望】

学生自身が自分の学び方をつかんだり、必死に技術を身につけようと努力したりすることから、技術試験の項目や対象の変更に関する望みや評価内容や手順に関する疑問や修正などが表され、＜OSCE をよりよい体制でうけることへの要望＞に集約された。

2. OSCE を活用した看護技術の主体的習得に関する学びの構造

5つの分類を中心の意味により構造化した結果、図2のように示された。【OSCE に向けた学習努力への充実と成果の実感】は、続く【自己の学びを振り返り自ら解決の糸口を見出す】方向へと力をつけるよう進展し、さ

らに学び方が身についていくことで、【学んだことを自分のものにする】へと発展し、最終的には単に技術を習得することを超えて、【看護を志向する態度の向上】へと看護に対する動機づけが強化されていった。

こうした OSCE での主体的学びの獲得プロセスを通して、学生は学びの志向や学びたい欲求が高まり、【OSCE の改善への要望】も多く抱いていき、学びの機会の改善への望みまでも表すよう変化した。

VI. 考 察

看護技術の主体的獲得に関わる OSCE を通した学びでは、試験を課されることにより、自然と学生が自ら技術習得に向けて試行錯誤し、解決策を模索できていた。他の技術試験に比べ、試験があること、試験が初対面の相手を対象に技術を実施しなければならないことが、試験までに学生自身が積極的な学習者になることを促していた。

試験前の反復練習を通した、学生間および自己の評価を契機として自らの学びの意味づけが繰り返され、自ら課題を見出すことに繋がっていた。こうした学びの体験は、看護実践技能を正確に身につけることに有用であった。一方、リアルなシミュレーションの中では、単に手順を暗記するだけでなく、患者の安全と安楽の保証に対する看護師の責任の重さを実感できる成果へと繋がっていたことは大きな教育効果の一つと考える。

学生は、積極的に反復練習する中で、自分の未熟さやなかなか習熟できない葛藤にも直面していた。失敗や反省を乗り越える手がかりに気づくことは、学生自らが自分の不十分な知識や技術を修正できる、クリティカルシンキングの力を培うことにつながる教育効果であると考え

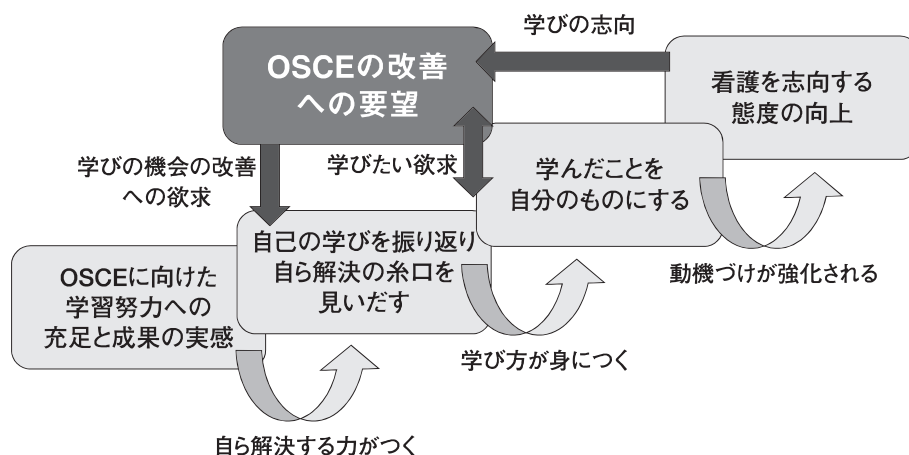


図2 OSCE を活用した看護技術の主体的習得に関する学びの構造

えられる。

前回の OSCE から導入している学生相互のピア評価は、他人の評価は甘くなるという自覚をもたらしたり、他者の評価を通じて自分の行為について省察し、評価しながら安全・安楽な方法を工夫したりするなどの学びも促進され重要な教育成果をもたらしていた。その上さらに、ピア評価は、自分が患者役を経験する機会となることで、患者の苦痛や気持ちを察する力が養われる教育効果が認められた。ピア評価を通して、学生がお互いに成長していく実感をもつことは、近年、表面的あるいは回避的な周囲の人々との関係をもつ若者が増えている⁴⁾中で、小さいながらもチームとして協力する対人関係を築くことを学ぶ機会としても教育的示唆に富むと考えられる。

試験後の教員と患者役の先輩学生からのフィードバックは、実習やさらに将来の実践への取り組み意欲、看護への熱意にもつながる達成感、課題を得る貴重な機会となっていた。現在は、学生へのフィードバックにおいて、学生が課題や意欲をもてるよう教育的配慮のある口調や内容でコメントを返すよう教員間で一貫した対応をしている。本研究の前には教育的態度が甘すぎはしないかという懸念もあったのだが、学生が教員の意図通りあるいはそれ以上に、自己効力感や自信をもっていたことは予測を超えた成果と言える。

OSCE 終了までに学生が得ていたもので、大きな成果は、学生が個別の自分の能力に応じて自己学習のこつをつかめていたことだった。この成果からは、OSCE を看護技術の習得に応用することが主体的な技術の習得を促すことを決定的とする教育成果と思われる。

また、OSCE を通して、看護師としてあるべき態度や看護への思い入れの深まりなど、単なる技術学習を超えた、看護を探究していく態度まで培われた経験をしていた学生が少ないがらいたことはこれまでの研究成果には明言されておらず、意外であり、非常に嬉しい教育効果であった。また、OSCE が結果的に看護を志向する態度を培っていくことは、本手法が基礎教育で効果を発揮する可能性を示すと考える。

OSCE を通して自分なりに看護技術の習得方法を身に付けた学生からは、さまざまな OSCE の改善に対する要望が挙げられた。効果的に主体的学びを育むためには、OSCE に向けたプロセスを通して自己学習環境と資源を整えることが求められる。OSCE を含めたシミュレーション教育、問題解決型学習は、学生の個別の能力を伸ばす反面、人や費用が講義や通常の演習よりも多く必要になる。現在、本学で OSCE に取り組んでいるのは

成人看護学領域だけであり、特に慢性期看護論のなかだけである。臨地実習が多い成人看護学領域で、さらに領域単独で実践的な演習を充実させていくことには、人的にも費用的にも限界があると実感している。できれば、より初歩の段階から学生が OSCE や SP、モデル人形などのさまざまな教育手法に触れて、臨床実践のシミュレーションを体験できることが望ましいと考える。数少ないが、看護学部あるいは看護大学が丸となって領域を超えて OSCE をはじめとしたシミュレーション学習の導入に取り組み始めているところも見られ始めている⁵⁾。医学教育では看護より早く OSCE が開始されているが、手技や問診の方法に主眼がおかれ⁶⁾、本研究にみられるような、対人間的な学びの成果は深く求められていない点で違いがあると考ええる。看護独自の OSCE の在り方を模索していくことが重要であるといえよう。

VII. 結 論

本研究では以下の知見が明らかとなった。

1. OSCE を活用した看護技術の主体的獲得に関する学びは10カテゴリ、【OSCE に向けた学習努力への充足と成果の実感】など5つに分類された。
2. 5つの分類は、【OSCE に向けた学習努力への充実と成果の実感】、【自己の学びを振り返り自ら解決の糸口を見出す】そして【学んだことを自分のものにする】へと力をつけるよう発展し、単に技術を習得することを超えて、【看護を志向する態度の向上】へと動機づけが強化されていった。OSCE での主体的学びの獲得プロセスを通して、学生は学びの志向や学びたい欲求が高まり、【OSCE の改善への要望】も多く抱くよう変化した。

VIII. 限界と今後の課題

本研究は、一施設での質的・廻及的研究結果であり、複数施設での前向き調査により一般化可能性を高める必要性がある。

今後は、OSCE から成人看護学実習へと、教育プログラムの継続的な評価を積み重ね、臨地にも通用するような看護実践能力自体やその主体的習得を促すよう、教育プログラムを評価、修正し、学生の看護実践能力を高め、より系統的な教育プログラムを構築することが重要と考える。OSCE は学生の看護実践能力の主体的習得に対し多くの教育成果が得られるが、人や費用負担が大きく組織的に取り組むこともまた課題といえる。

引用・参考文献

- 1) 山崎美恵子、長戸和子 (2002) : クリティカルに考える能力の育成 ; 看護系大学における看護技術教育、インターナショナルナーシングレビュー、25(2)、p36-40.
- 2) 小島善和、高橋奈津子、佐藤幹代、長瀬雅子、雄西智恵美、藤村龍子 (2002) : Self-Directed Learning に焦点を当てた看護基礎教育の展開、東海大学教育研究所、研究資料集、第10号、p204-209.
- 3) Bernard Berelson 著 (1957) : 稲葉三千男、金圭煥訳、Content analysis、社会心理学講座 7 大衆とマス・コミュニケーション 3 内容分析、東京、みすず書房、p1-79.
- 4) 岡田努 (2007) : 現代青年の心理学-第2章データが示す友達関係、世界思想社、p45-70.
- 5) 山内豊明他 (2008) : シミュレーション教育の目標と評価、インターナショナルナーシングレビュー、31(4)、p12-51.
- 6) 日本医学教育学会編 (2005) : 基本的臨床技能の学び方・教え方-Essential Minimum と OSCE、第1版、東京、南山堂、p121-152.

Abstract

Purpose: To identify students recognition about comprehensive learning experiences including objective achievement and assignment through learning nursing practice skill and independent acquire skills at OSCE (Objective Structured Clinical Examination) in Chronic care nursing, a subject of Adult Nursing.

Method: After approval by the belong department research ethics board of review, we've started study. Subjects were 74 third grade student's reports which mentioned their experiences for OSCE at 2007. We analyzed all description using qualitative inductive method.

Result: Learning experience about independent acquire nursing practice skills through OSCE classify 10 categories and then 5 groups, including 【A feeling of sufficiency learning effort and real result toward OSCE】.

Conclusion: At the OSCE, setting the tests naturally leads to search solutions by themselves. Peer and self evaluation and feedback from the faculty after OSCE were help them get the meaning or task, and will tackling with a problem. Moreover to foster attitude for intend to do nursing. Preparation for self-learning environment and resources in OSCE makes effectively encourage Self-directed learning.

Key words: Adult Nursing, OSCE, Nursing Practice skill, Self-directed learning